184 magazine【いち・はち・よん】vol.3

September 2013

Take Free
ご自由にお持ちください

こがねいを再発見する
フリースタイル・ペーパー、第3号!

小金井市内の3鉄道駅に発想を得て誕生した三姉妹キャラ。小金井のことならおまかせ!!

特集

ムカシこがねい

こ、何があったっけ？　駅前の景観は変わり、大きな家の跡にはビルが建つ。中央線だって、あたり前のように高架を走っているが、ついこの間までは「開かずの踏切」を作っていた。

ちょっと昔の小金井を訪ねてみよう。そんな企画のもとに、今号の取材がスタート。慌ただしく過ぎ去る日常に、しばし足を止めて地域のことを振り返ってみれば、この町を見る目も変わってくるかもしれない。

上の白黒写真は、49年前の武蔵小金井駅北口の様子。それを現在の駅前に重ねてみた。そうそう、この歩道橋も、撮影のあと撤去されてしまった。

名付けて「ムカシこがねい」。この特集が、小金井の昔と今を未来に繋げる、ささやかなタイムカプセルになればと思う。

この夏、50年の営業に終止符

さらば、長崎屋

気が付けばMEGAドン・キホーテに生まれ変わっていた長崎屋。閉店を惜しむ声を受けその歴史を振り返ります

田村秀美（緑町在住／子どものころの夢：いがらしゆみこのような少女まんが家）

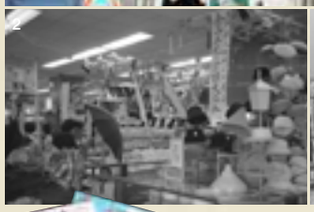
1963年、長崎屋は大規模団地が建設され人口急増中の小金井に進出。平塚の布団屋から転身したチェーンストアは24年間で65店舗に。1971年、7階建て前面総ガラス張りの新店舗を武蔵小金井駅北口に開店。屋上遊園地で仮面ライダーショーが開かれ、ソフトクリームやベーカリーなど当時まだ珍しかったハイカラな食べ物が並んだ。

そう、当時の小金井市民にとって長崎屋は、「まちへ行こう」と家族で出かける特別なハレの場だった。外食が日常でなかった時代、『レストランおあしす』で食べるお子様ランチの味は格別。母親たちは洋裁用品を買い求め、「肌着は長崎屋」というこだわりを娘に伝授。ピンクレディーの新譜発売日にはレコード店に行列。休憩スペースのベンチに座る男子生徒の視線を気にしながらエスカレーターに乗る女子中学生。40代以上の小金井市民の脳裏をよぎるのは、そんな思い出の数々だ。

今や激安ジャングルに生まれ変わった同店。毎日がハレの日の賑わいを見せる。

長崎屋小金井店 略年表

1963年	今の西友駐輪場の北側に開店
1971年	現在の場所に移転し新店舗開店
2008年	7階「レストランおあしす」閉店
2011年	八王子店がドン・キホーテにリニューアルし、小金井店が都内最後の長崎屋に
2013年	都内で唯一のMEGAドン・キホーテにリニューアル



©小金井市

1 シンボルマーク「サンバード」は長崎屋の頭文字「n」を平和の象徴ハトにアレンジ。目の部分は太陽。2 1963年旧店舗の店内。3 1971年新店舗開店。4 長崎屋社内報「おあしす」

“わたしと長崎屋” —— 長崎屋にまつわる思い出をお聞きしました

丸山芳己さん

1965年生まれ。小金井生まれの小金井育ち。小さい頃は家族で長崎屋に行くのがつつましい暮らしの中のたまの贅沢。帰りは決まってタクシーで、車に乗れるのが嬉しかった。おあしすで食べたラーメンが、人生初ラーメン

石川理麻さん

1971年生まれ。国分寺市在住。小1までの5年間、小金井で育つ。長崎屋の催事で描いてもらった似顔絵が怖すぎて泣く。ピンクレディーグッズを求めて何度も長崎屋に通うも、お目当てのミーちゃんがいつも売切れで涙

岡田誠さん

1945年生まれ。立川市在住。1968年より長崎屋に32年間勤務。小金井店には1972年以降、通算で6年。当時は19時閉店・定休日ありで、出社前に早朝野球をしたり、夜は社員食堂に住職を呼んで習字を習ったりした

5 今はなき駅前ブツ切り歩道橋とサンバードのコラボ。

6 外壁の看板設置によりはめ殺しとなった3階の窓。休憩用ベンチは開店当初から設置。

7 見上げると天井一面にレトロなスプリンクラー。

8 7階から上は閉鎖中。おあしす閉店を告げる立て看板にひっそりとサンバードの姿が

Photo：はしも

特集＊ムカシこがねい

ぬくい湯の佐藤さんご夫妻。本業の工務店が建てた銭湯を引き継いだ。燃料の1割は薪で、機械が壊れても薪で焚くため休業したことがない。青森ヒバの浴槽はゴシゴシと磨きこまれている様子。ヨーロッパ調のタイル絵は今では職人がおらず貴重

昭和にタイム・スリップ

ぬくい湯に潜入

1964年に開業。ほとんど変わらないというその佇まい。昭和を感じる銭湯の内側は？

岡本実希（中町在住／子どものころの夢：幼稚園の先生）

そ の暖簾をくぐるのは、少々勇気が要る。若い世代にとって、古い銭湯とはそんな存在かもしれない。では家にお風呂が当り前の時代に、人はなぜ銭湯へ行くのか。その理由が知りたくてぬくい湯へ。一番風呂にはリハビリを兼ねて毎日通う老婦人。番台で挨拶を交わす常連さんは、自然と安否確認。一人暮らしのお年寄りは、もしものときに安心。子どもは大人を見ながらお風呂の所作を覚える。何かと敬遠されがちな他人の目が、ここでは温かなものとして感じられた。ぬくい湯に残る昭和そのままの空間と人付き合い。その安心感を求めて人は銭湯へ行くのだろう。

貫井北町3-4-4
☎042-383-5757
㊡16:00 ～ 23:00
毎月5日・15日・25日定休
（日曜、祝日の場合は翌日）

“ MUSASI - MILK ”

小金井に牧場があった

なだらかな丘をわたる風、とんがり屋根のサイロ、木陰で休む牛
——そんな日常が80年前の小金井にはありました

大垣喜世（貫井北町在住／引っ込み思案な子どもでした）

住宅や店舗が建ち並ぶ貫井北町3丁目、仙川北岸から中央大学附属中・高等学校のあたりにかけて、かつては乳牛が草を食むのどかな風景が広がっていました。ベビーフードやシッカロールなど、ママならいちどはお世話になったことのある和光堂（株）の初代社長、大賀彊二（きょうじ）氏が1934年、この地に「武蔵農場」をつくり乳牛の飼育を始めました。1936年には36頭の乳牛から“こい、うまい、新しい”がキャッチフレーズのMUSASI-MILKを製造販売していたなんて、モ～すてき!!

©小金井市教育委員会

MUSASI-MILKの当時のチラシには北原白秋作詞の童謡「乳の壜」が使われています。意外なつながり！ また、武蔵農場での乳牛飼育や牛乳配達の仕事は、近隣住民の副収入源にもなっていました。農場は1942年、戦争の影響を受け閉鎖しました